

## 梵語奈留別誌：續

小野島，行忍

干潟，龍祥

<https://doi.org/10.15017/2332982>

---

出版情報：文學研究. 36, pp.1-13, 1948-03-30. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：

# 梵語奈留別誌 (續)

故 小野鳥行 忍遺稿

干 瀉 龍 祥 補輯

## 補輯者のことば

故小野鳥君は平素研鑽の傍ら、國語のうち梵語から來るなるべしと思はれるものを手記に書き留めて居たのであつたが、それらがやゝ量をなし、考案も學者の批評を仰ぐに足るに至つたところから、昭和廿年三月發行の本誌に「梵語奈留別誌」の標題の下に、まづその序文としての「たからぶね」の項を發表したが、つゞいて本文十二項目と、跋とを世に問ふ豫定であつたことは、その目次で明かである。然るに惜むべし、同君は同年十一月七日突如として往生した。

あの藝術家はだの傑性の、一分のすきも見せない名文、その文を通して、或は通さずにも、知り得たあの純江戸子はだの、藝人はだの風貌には再び接することの出來なくなつたこと、そして九大のかくれた一至寶、否我國梵文學界での一至寶であつた所の同君を、五十四歳で失つたことは洵に残念である。「梵語奈留別誌」の稿を出した年の四月からは、梵文敘事詩中隨一と稱せられるラーマーヤナの翻譯にとりかゝつて居た。その頃は夜となく晝となく、夢となく現となく、譯文の一句二句を口ずさみつゝ獨りほゝえんで居たものである。假すに十年を以てせば、恐らくは梵詩ラーマーヤナは、同君のあの洗煉された、しかも印度人の、そして梵文の、氣分をさながらに表し出したあの名調子を以ての日本



文に於て、我々が味讀するを得るに至つたであらうと思へば、うたゝ愛惜の情に堪へない。

さてこの梵語奈留別誌の續稿だが、これは前號所載によれば、恰も全體の草稿が出来て居たかの如くであるが、實は然らず、たゞ手記程度のものが残つて居るのみで、草稿なるものは全然ない。これも故君の性格をよく表はして居る。

自らの氣のすむまでに煉り上げた文でなければ一切筆にしない、又一應筆にしてからも、幾回幾十回となく推敲するのだが、その度に書きては消し書きては消し、而して潔癖の癡性だから、書き消した原稿は一切残さない、必ず淨書した後破棄してしまふのである、故人の遺稿を整理に行つた自分は、結局既に上梓すみの原稿か、或は既に會心の句となつて居るものか、さなくば單なるメモ程度のもの以外には何物も發見し得なかつた。そこでこの續稿にした所が、全くメモ程度のものであるから、そのままでは上梓出来ない。さればとて前號の序文のみで後を出さなければ、序文そのものすら、序文としての意味をも爲さないが如きものとなつてしまふ、恐れがあり、それでは本人の氣もすまないであらうし、學界としても、惜しいことであるから、自分は漸くそのメモを拾ひ集め、どうにか理解し得る程度に文にしてこゝに出すことにした、文責は全く自分にある。而して前回の目次に見へて居る語の中、自分が見て、既に先覺の發表して居ると思つたものは省くことにした、例へば、(一)の「西」(Sk. Saraya)、「瓦」(Sk. Kapila)、「鉢」(Pr. Patta, Sk. Patra)、「(一)の「佛」」(琉璃=吠瑠璃 Sk. Vaidurya)、「(三)の「梅檀」(Sk. Candana)、「(四)佛智」(Sk. Agada)、「(四)の「佛とけ」(Sk. Buddha=浮圖+家)、「(五)の「つゝ」(Pr. Thera)、「(六)の「かふ」(=僧伽藍 Sk. Saṅgharāma)、「(七)の「千手とたら」(千+漫荼羅 Sk. Mandala)、「(八)の「かろ」(Sk. Khasa)、「(九)の「幡」(はた) (Sk. Patika)、「(一〇)の「夜叉」(Sk. Yaksa)、「(一一)の「#」(Sk. Mara) の如きである。又、なほ考慮の餘地ありと自分が思ふもの、例へば(二)の「くさ」(何れも故君は Sanikha の音寫とする)の如きもこゝに割愛した。又(一一)の中の「さら」を除いた他のものは、すべて梵語から來たものでないからこの論稿からは除くを至當と思つたから削除した。又時には自分の意見を増補した箇所もある、これは故人もその生前に於て、かゝる問題については常に



自分に相談をかけられて居たのであるから、いよいよ上梓する場合には必ず自分の意見を加へられるに相違ないと思ふが故である。以上の自分の取計らひについては讀者各位は之を諒とせられたい。(昭和廿二年三月十八日)

略 號

Sk. = Sanskrit

Pr. = Prakrit これは印度アーリヤン語系に屬するもので、サンスクリットの出來た後に於て、自然に出來て來

た諸地方の方言語や、パリーリ (Pali) 語や、ジャイナ語 (Jaina prakrit) 等一切を總稱する。

[MW] Monier-Williams : Sanskrit English Dictionary.

(一) ④ 蓋

Sk. *puṭa*. [MW] a cup or basket or vessel made of leaves; the enveloping or wrapping of any substance; a cloth worn to cover the privities. 梵語の意味は入れ物、包むもの、蓋ひかくす布等であるが、恐らくその包み蓋ふところから日本語の今の用法の如く使はれるに至つたものであらう。

(五) ㊦ 大<sup>オ</sup>まか (大摩訶)

「おほ」は云々までもなく日本語の「大」の意であるが、「まか」は Sk. *Mahā*. [MW] great, mighty, strong, abundant. 即ち大の意味で、同義の異種語を重ねたものである。

(五) ⑧ 億こぶ (億劫)

億は數字の億であるが、こぶ(劫)は劫波 Pr. *Kappa*, Sk. *Kalpa* の波を省畧したもの、劫波は世界の壽命で、

四十三億二千萬年と稱せられる。従つて、億劫は非常に長い年月をいつたもので、轉じてそれほど長年月を要するが如き事柄で、とても厄介な事柄で、するのがいやになる氣持を表はした語。

(六)の① 無 駄

Sk. Mudhā. [MW] ind. invain, uselessly (Fr. /muh. to err; fail) 即ち「無益に」の意から來たものである。

「駄物」は「無駄物」の「無」が省畧された語。

「駄目」は「無駄」の「無」が省畧されたのに、「場合」の意を表はす「め」(目)(憂き目の目の如し)がついたもの。(大言海)で、「むだ」を「空」「黙」の轉とするは不可。

(六)の② 馬 鹿

これは Sk. Paka. [MW] a. very young, simple, ignorant, artificial, honest; の「疊か」の意をとつたもので、それが日本語になつてから、馬鹿とあて字をしたもので、支那ならば馬鹿は「ばろく」で「ばか」とはならない。而して日本で「馬鹿」とあて字をしてから「鹿を馬と言ひしによる」云々の傳説が附會せられたものであらう。

高楠先生は嘗て「ばか」は梵語の Baka (青鷺の一種 ardea nevera で、これは偽善者、詐偽師等の意に用ひられる) から來た語で、Sk. baka-murka, (block head, fool) の baka を取つたものであらうとせられたが、しかし baka には「疊」の意味はなくむしろ奸智にたけた詐偽師の意であるから、「ばか」をこの baka から來たものとするは不可であらう。



〔大言海〕では、「バカ(名)、馬鹿ハ當字ナリ、梵語 moha (慕何、痴ト譯ス) 又ハ mahallaka (摩訶羅、無智ト譯ス)ノ轉ニテ僧ノ隱語ニ起レル語ト云フ、或ハ耄ノ轉カトモ云フ、秦ノ趙高ガ鹿ヲ指シテ馬ト言ヒシニ附會シテ馬鹿ノ字ヲ當ツルナド、湯桶讀ナルノ拙キノミニアラズ趙高ガ事ハ欺キテ侮蔑シタル意トハナレ、愚ナル意ヲ成サズ云々」と、思ふに Moha は明に愚痴を意味するが、しかし、「ばか」の原音は Moha (慕何) から來たとするよりは、Pika (婆訶) から來たと見る方がより適切であらう。

(七)の㊦ あばた (菊石)

これは高楠先生は嘗て Sk. Arbuda, Pr. Abbuda (腫物、瘤、粘膜瘤の意) から來たものとせられたが、私は Sk. Avata ([MW] a hole, vacancy in the ground; any depressed part of the body; a sinus) 即ち「穴」、  
「身體のくぼみたる部」「袋の如きくぼみ」、から來たものと思ふ。顔に「くぼみ」のあるのを穴のある顔、即ち「あばた」(Avata)と呼んだのであらう。

(八)の㊧ べいろしや (毘盧遮、よくしやべること)

これは Sk. Vairocana ([MW] a brightening) が遍照の意であるより轉じて廣長舌を振ひ遍ねく世界にひろげる意より、廣長舌を振ふ、即ち、よくしやべる意となつたものと思ふ。

(八)の㊨ えんだら (因陀羅)

これは Sk. Indra (即ち帝釋天) から來たもので、その勇猛性から狂暴性へと轉じ、それが「悍婦」「ふんばり」の意となつたものであらう。



因みに東北地方の「えじら」「じじら」、或は「じじらあるじ」又は中國、九州の「えじい」「怖い」もこれから來たものか？

(九) ② 婆沙羅 (ばさら、ばしやら、婆日羅、婆折羅、伐闍羅、ばしやれる、しやれる)

これらはすべて Sk. Vajra の音寫から來た語で、Vajra は金剛杵 (a thunder bolt)、特に帝釋天の持つ金剛杵を指す、この語の梵語に出て來る最初の意味は金剛杵である。而してこの金剛杵はそれ自身頗る堅く、他を破摧する能力を持つて居る所から、又、金剛石 (diamond) の意ともなるが、これは第二次的の意味である。

〔大言海〕で、バサラ (梵 Vajra) の第一の意味を「金剛石」とし、金剛杵を第二の意味として居るのは誤りである。「ばさら」(梵 Vajra) はアーリヤ族の守護神帝釋天の持つ金剛杵で、これは「猛烈に」、「むやみに」、「無造作に」破摧する所から、これが日本語の中に入つて、一方九州博多地方の方言の「ばさら」即ち、「むやみに澤山」、「大ざつば」等の意になり、他方、むやみに、斟酌せずに振舞ふといふ所から、又意味が大凡二通りに分れて用ひられるに至つた、その(一)は、粗放、狼藉、しどけないこと、その(二)は、きまりによらずに一風はつた趣、風流、だて、豪奢、の意となる、例へば、

「粗放」の例、(鴉鷺合戦) 「けしからぬ軍、ばさらにて煉貫の母衣を掛く」(言泉所引)、

「狼藉」の例、(洞房語園下) 「萬治寛文の頃、町々に六法男達といふ者徘徊して…吉原へ入込み、拔折羅狼藉の事共、度々に及ぶ」

「しどけない」の例、(心中刃は氷の朔日) 「町方に居る分に言ひなした私が身が、ばしやれた形で逢はれもせ



ず」(言泉所引)

〔同意〕(夕霧阿波鳴渡)「あの傾城の**ばしやれもの**」(言泉所引)

「きまりによらずに一風かはつた趣の意の例、(續教訓抄)「下藤の笛ともなく**ばさら**ありて任るものかな」(言

泉、大言海所引)

〔同意〕(體源抄、九、舞の事)「萬人屬目見之不美、何の興かあらむや、**ばさら**あり、しなあり、振舞はむとすれば拍子を違へ、又拍子を不乖とすれば、**ばさら**なし、……此兩事兼ねて、めでたく見むこと……、誠にありがたきことなり」(大言海所引)

〔風流〕の例、(建武式目)、「近日號**婆佐羅**、專好過差……風流服飾無不驚目、」(大言海所引)

〔だて〕の例、(貞丈雜記)、「古、**婆娑羅**なる人といひしを、今は伊達者といふなり、**婆娑羅**を好むなど、日記に見えたり」(言泉所引)

〔豪奢〕の例、(太平記、二十四、天龍寺建立事)、「そゞるなる**ばさら**に耽りて、身には五色を粧り、食には八珍を盡し、茶の會、酒宴には若干の費を入れ、傾城田樂に無量の財を興へしかば云々」(大言海所引)

次に動詞となつては、**ばしやれる**(下一)、「取亂した様になる、」「遊治なる様になる」となることは、先に「しどけない」の處で出した如くであるが、更にその「ば」が落ちて**しやれる**となる。「しやれる」がもし「洒落」から來たものとするならば、「しやらくれる」となるべきであるが、かゝる語はないから、「しやれる」は「ばしやれる」から來たものと見ねばならぬ。



(一〇) ちち はは、ちち、ばは、

〔大言海〕には「ち」(名) 靈(持ノ約)、神、人ノ靈、又、德贊メテ云フ語、云々、」又

「ち」(名) 父(カソ)、常ニ重ネテちちト云フ、熟語ニハ連聲ニテ濁ル、大父、小父ナドコレナリ、云々、」又、

「ちち」(名) 父、「靈」ヲ重ネテ云フ語、小兒ノ語ニ起ルカ、應神記十九年ニ國巢人ガ天皇ヲ指シ奉リテ、廣ガ知ト云ヘリ、カク云フちヲ重ネタルハ乳ヲちち、又、うまうまをまま、愛し愛しヲははト云フ類ナリ、梵語ニモ比多ト云ヒ(梵語雜名)、沖繩ニハちちト云ヘリ、「云々」

とあるも、私は「ちち」「たた」「ちち」等一類の語は Sk. Tata (〔MW〕 a father; a term of affection addressed to a junior) から來たものと思ふ。Tata は父の意であるが、タ→チ→テ→トと轉じ、「たた」→「ちち」→「てて」→「とと」となり、何れも父を表はすこと周知の通りである。

公家の語「おたくさま」「おたあさま」は勿論「た」であるし、碁太平記白石嘶、七、(天明七、八月十二日、豐竹座、作者烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛、焉鳥旭、三津環)

「コレエ父は五月田植の時、代官の志賀臺七と云ふ惡で、な侍に切られてお死にやり申したわいの」……「……きつと敵と云ふ事もならず、父は犬死、語るも長い事なれど、……跡は私と母ばかり、便ない身に下地の大病、重り〜てがアまは六月十六日、悲しや終に死しやり申したハイナウ」の

ただアも「たた」の濁つたものである。熊本の武家の「ででさん」も、京都の上流の「おでエさん」も「て〜」から來たもの。次に

「ちち」は「ちちぢぢ」(父父)即ち、父の父、祖父を表はしたものである。重ねる時に後のを濁るは國語の語法で、例へば、ちぢ(千々)、せせ(瀬々)、つづ(津々)、ひとびと(人々)、ことごと(事々)の如し、同音二つより成る語を重ねる時は二音共に濁るのである。「大言海」で靈を重ねて「ちち」となつたするが、「ち」を重ねれば「ちぢ」となり、「ちち」とはならぬ筈。故に「ちち」(父)の語源を靈とするは當らぬ。又、「大言海」で「ちぢ」は「おほぢ」を重ねた語とするも私は採らぬ。

「はは」「ばば」については、

「大言海」では「はは」(名)母、(愛し、首音ノミヲ重ねテ云ヘルニテ、小兒語ニ起レルナラム、父ノ靈々ノ如シ、又、母ヲいろはト云フ時ハはノ一音ニ云ヘリ)(萬葉集十九長歌)「波播ソバノ母ノ命」とあるも、私には「はは」(母)、「ばば」(祖母)、「あば」(母)、「あま」(女の出家者、尼の字を當て居るが、尼は比丘尼 bhikkhuni の比丘を省略したのみで意味はない)、(舞樂の案摩の舞の案摩)、(蔑詞としてのおま、このおま奴」といふ時の如し)は何れも Sk. Ambā, Pr. Anna ([MW] a. mother, good woman, as a title of respect) から來たもので、これが日本語で一方は「アバ」となり他方「アマ」となつたものと思ふ。(因みに、獨乙語 Anne その古語 Anna は乳母の意であるが同語源であらう)。

「あば」羽前羽後では母の意、

「あは」(母)「あは」↓「はは」となつたか、「干潟曰、この轉化の理由の説明不十分である」

「あも」(母、東國、古語)、「おも」(母、古語)、「おもうさま」(母、公家の語)、先に「だゞア」の時



に出した白石晰の例の「がアま」も母の意であるが、これは上に「が」がついたのである。

「ばば」(祖母)は「ぢぢ」(祖父)の時と同様に「ははばば」(母母)となつて「ばば」となつたもの。

「あま」(女の出家者)は Amba が Amma に轉じた方から來たものであらう。案摩舞の案摩も蔑詞としての「あま」も同語源であらう。

なほ、「あば」「だだ」は地方によつて交錯して居ることがある。「あば」は陸中では、父を表はし、「だだ」は岩城では母を表はし、又、「おたアさん」は和泉、河内攝津京都等では母を表はし、後志では「ちち」は母を表はす如し。

(一一)の② 般若、沈香、伽羅に(ス)ン。

「はんにや」(般若)は Pr. Paññ, Sk. Prañña の音寫であり、これが智慧を表はす(女性)名詞であることは云ふまでもない。こゝに問題となるのは、かゝる般若が、何故に般若面(能て用ひる鬼女の如き怖ろしき容相の假面)や、怖ろしい面相の女、悍婦、或は沈香の一種質は伽羅と同じものを表はすが如きに用ひられるに至つたかといふことで、これについての古來の國語學者の解釋が未だ我々を首肯せしめるに至つて居ないのに願ひ、私はこゝに一つの試案を出す次第である。

「言泉」では、「はんにや」(般若)、(名) (一)分別妄想ヲ離レテ實相眞如ヲ達觀スル智慧(二)般若經ノ略、(三)般若面ノ略、(枕草紙)「ひろき物、あはうの鼻、はんにやの面」(四)怖シキ面相ノ女、(五)香ノ一、沈ノ一種、質ハ伽羅、タキ初ヨリ香花ヤカニシテヨク、火末ハ似ニ同ジ、(六)紋所ノ一、般若の假面ニ象レルモノ」とあり、(大



言海」には、「……俗ニ恐ルベキ相ヲナセル鬼女ノ稱、謠曲「葵の上」ニ婦人ノ怨靈、人ヲ惱マスヲ僧祈リテ經文（般若經）ヲ唱フ、祈リコメラレ、怨靈「あら恐しの般若聲や」ト云ヒテ消ユ、般若經ニ菩薩ノ魔怨ヲ推伏スルコトアリト云フ。般若聲ハ經文ノ聲ナルヲ誤リテ怨靈ノ聲トシタルカ、（般若聲云々ノ説ハ山本北山ノ説ナリト善庵隨筆ニ云ヘリ）ト云フ、或ハ云フ、十六善神ハ般若經ノ守護神ナレバト云フト云ヘド、男女ノ違ヒアリ、或ハ云フ、昔女房ノ妬心深キヲ濟度セムトテ般若坊ト云フ僧ノ打チシ面アリシニ起ル（其面現ニ今春ノ家ニアリト）、外面如菩薩内心如夜叉ノ意ヲ表ハセルカト云フ。（海錄十八）梵語般若茶ノ轉、怪物ノ義ナリト、女夜叉。」云々 何れも事柄の敘述はそれでよろしきも、解釋は牽強附會の處が多い。私の考では、

般若 (Panna, Prajna) は、語そのものは女性名詞で、智慧の意であるが、印度ではこれが人格神化しては辨天 (Sk. Sarasvatī) 辨財天、辯才天) と同一視され、又、印度教の Sakti (有力な神の女性的性を神格化したもの) 思想の盛となるに及んでは、般若は又一つの Sakti とせられることがある ([MW], Prajñā の項参照) 而して又辨天は毘紐拳 (Vishnu) 神の Sakti とせられることもあり、又、荒神 (Rudra) の Sakti とせられることもある (cf. [MW] Sarasvatī) 而して Vayu Prīna (風神古事記) によれば、荒神の Sakti は二様あり、一は白色で柔和の性を表はし、吉祥天 (Lakṣmī) 辨天 (Sarasvatī) の如きであり、他は黒色で狂暴性を表はす、塞女神 (Durgā)、黒女神 (Kālī) の如し。(cf. [MW] Sakti)。又、辨天 (Sarasvatī) は辯舌と學問との女神である。彼女は吉祥天と對抗する、時には梵天の女にして妻とせられることもある、又時には塞女神 (Durgā) と同一と見られることもあり、又毘紐拳又はマヌ (Manu) の妻とせられることもある (cf. [MW] Sarasvatī)。以上によ



つて知られる如く、般若は神格化され辨天と同じとなり、又、女性性力の神格化された Sakti とも見られ、Sakti としては辨天は白色柔和性を表はすのが普通であるが時には狂暴性の Sakti と同一視されることもあるのであるから、Durga と同一視されれば、それは即ち一名黒女神 (Kali) である。故にこゝでは般若が黒色狂暴性の女性とせられるわけである。従つて般若面を黒色狂暴性を示す鬼女の如く表はすのも、又、怖ろしき面相の女、乃至悍婦の意とせられるのも、さては沈香の一種で質は伽羅とせられるのも所由あることが知られるであらう。因みに云ふ、「伽羅」は Sk. Kalaguru の畧、Kala は「黒」、aguru は「MW」The fragrant Aloe wood and tree, Aquilaria agallocha.) 即ち香木で、その木の心の堅い處は黒褐色で水に沈み、香としてはよく、邊材(しらた、即ち沈のぼた)は水に浮き香よからず、伽羅香は色黒く香強く、香の中の黒女神 (Kali) と稱すべきである。

〔干潟補〕 小野島君の般若に關する以上の説は頗る採るべきものがあるが、たゞしかし、その論據の樞要點となつて居る所の、辨天が時としては Durga (= Kali 狂暴性の黒女神) と同一視されて居るといふことは、〔MW〕は大敍事詩マハーバーラタ (Mahābhārata, 畧號 Mbh.) にあるとするが、しかしマハーバーラタのその場合、果して如何なる點で兩者を同一視したのかは明でなく、況んやその他には例が見當らぬやうであるし、又、Sakti 思想は後の佛教中の密教、特に西藏のラマ教の中には全面的に採入れられ、諸佛も諸菩薩も夫々その Sakti を持つことになつて居り、原初佛 (ādibuddha) なる持金剛 (Vajradhara) の Sakti は般若度 (Prajā-pāramitā) であり、瑜伽行派では Heruka は悲の佛格視せられたもので、その Sakti は般若 (Prajña) と

せられるが、然しこれら何れの場合も狂暴性の黒女神 (Kali) 的のものを Sakti としては居ない。男性の大黒神 (Mahakala) は守護神として重んぜられ、像の作例も多いが、女性の黒女神 (Kali) は作例が見當らぬやうである。右の如く印度教でも密教でも、狂暴性の Durgi (= Kali) を辨天や般若と同一視したことはあまり例がないやうに自分には思はれる、この點がもつと適確に實証されない限り、故君のこの説は頗る面白い説ではあるが、今の處まだ論據が弱いといはねばなるまい。しかし確かに一つの暗示を投げかけ、假説を出して、今後の研究を促した點に於て注目に價するものである。

(跋) 婆心言。

〔干潟補〕 こゝでは故君は何を云はんとして居たのかは、草稿もなく、メモさへもこゝは残つて居ないので全くわからぬとせねばならぬ。たゞ想像すらく、こゝで同君が平生持論として學生などによく語つて居た所を文にせうと思つて居たのであらう。即ち、國語國文學乃至は國史を研究する者が今少し梵語をやればもつと易々と新方面を開拓することが出来るであらうに。從來の國學關係の人達が梵語といふと「億劫」がつて殆どやらないから、つまらぬ事にむやみに苦しみ、見當ちがひのことを「千まんだら」ならべつゝ「無駄」骨ばかり折つて居ることが「ばさら」あること「ばしやら」の解釋に於ける如しとでも「しやれる」のであらうと。



